

『バラの雨』シナリオ

○字幕

『近年起きた航空機や鉄道の事故、災害などで大切な家族を失った人々にこの作品を捧げる』

○空港・展望デッキ（セピア色の風景）

佇む母親と子ども（幼児）

旅客機が滑走を始めると、その幼児もデッキを走って追いかける。

轟音と共に離陸する。

手を振る子ども。

すると、空から赤い花びらがひらひらと舞い落ちてくる。

幼児「（空を見上げ、笑顔で）パパだ！

パパが降らせてるんだ！」

○タイトル『バラの雨』

○シアトル・点描

2006年（字幕）

未来都市のような近代的な港町。

○大学・大教室

数学の授業。

大勢のアメリカ人学生の中に混じって

日本人の行田一成（20才）がいる。

一成、ノートの切れ端で紙ヒコーキを折っている

一成N『航空工学はたくさんの力学から成り立っている。飛行力学、流体力学、構造力学、熱力学：』

一成、5列前の左斜め前方に座っている女性を見る。

日本人の夏月（19）。黒ぶちメガネをかけた、いかにも優等生という感じ。

一成「……」

一成、紙ヒコーキの左翼に少し折り目をつける。

一成N『例えば、この紙ヒコーキが飛ぶんだって、れっきとした力学の法則に基づいているのだ』

一成、狙いを定めて紙ヒコーキを飛ばすと、空中を左旋回し、そして、夏月の目の前でピタリと着陸する。

夏月「（驚いて）！？」

紙ヒコーキを開くと、メッセージが。

『今夜、NBAの試合観に行かない？』

夏月、げげんそうに後ろを振り返る。

一成「（笑顔で手を振る）」

夏月「（困惑の表情）」

○同・階段

授業が終わり、学生たちが教室から出てくる。

一成、夏月の後ろを追いかける。

一成N「つまりは、この世で起きるすべての現象は見えない法則に支配されている。

だから、女を口説き落とすんだって、ある法則に基づいて行えば難しい話じゃない：

今、目をつけてるのは同じ1年で、薬学部

の彼女』

一成、夏月に声を掛ける。

一成「坂元夏月さんだよね？」

夏月「（無視）……」

一成「オレ、航空工学部の行田一成。この前大阪なにわ会のパーティーで一緒だった」

夏月「知りません」

一成「そりゃないよ、君のことずっと見てたのに」

夏月「……」

一成「まあ、いいや：それよりさ、今夜ヒマでしょ、バスケット観に行かない？」

夏月「無理です」

一成「どうして？」

夏月「勉強がありますから」

一成「：もういいじゃん、勉強なんてさあ。

さんざんやってきたでしょ？」

夏月「……」

一成「ここは西海岸だよ」

夏月「：私、勉強が好きなんです」

一成「じゃあ他に好きなことは？」

夏月「……（思いつかない）」

一成「逃げるだけじゃないの、勉強に」

夏月「！？：違います、ほっといて下さい」

一成「（追いかけて）ムキになるところが

怪しいなあ：じゅあ、気が向いたらでいい

から」

一成、チケットを無理やり夏月の手に

押し付けて渡す。

夏月「困ります！」

返そうとするが、もう一成は遠くに

離れてしまう。  
一成「いらぬなら捨てちゃって」  
夏月「……」  
一成「別にバスケットを観に行くだけだ、  
取って食おうってんじゃない」  
夏月「……」  
一成「（笑顔で）じゃあ、待ってるからネ」  
夏月「……」  
夏月「……」  
○シアトルセンター  
NBAの試合。  
地元チームへの熱狂的な応援のなか、  
その期待に応えるようにに次々とシュー  
トを決めていく。  
一成「いいぞ、ソニックス！」  
一人で応援する一成。  
ふと後ろを見ると、夏月が立っている。  
夏月「……」  
一成「おうッ！（笑顔）」  
一成、夏月を隣の席に座らせる。  
（時間経過）  
夏月「……（じつと見ている）」  
一成「（夏月に）どう？」  
夏月「まるでサーカスみたい」  
目を輝かせている夏月の横顔。  
一成「……」  
そしてハーフタイム。  
チアガールのアクロバティックな  
ダンス。  
夏月「……」  
一成、生ビールを持って席に戻る。  
一成「（夏月に差し出し）ハイ」  
夏月「ダメよ、まだ私19だし」  
一成「それは日本の話だろ」  
夏月「えっ？」  
一成「アメリカでは18才からOKなんだ」  
夏月「……そうなの？」  
一成「うん」  
夏月、ビールを受け取り一口飲む。  
夏月「おいしい！」  
一成「イケる口だね」  
夏月「そうかも（さらに飲む）」  
一成も飲む。ニコニコ笑ってる。  
夏月「どうしたの？」  
一成「……実はさっきのウソ」  
夏月「何が？」  
一成「アメリカは日本より飲酒に厳しくて。」

飲んでいいのは21才からなんだ」  
夏月「ええっ、だってもう飲んじゃった」  
一成「（笑いながら）知らない」  
夏月「ええっ？」（困った顔）」  
会場に実況アナウンサーが登場すると  
一斉に盛り上がる。  
実況アナ「（英語で）お待ちかね、キスマー  
の時間がやって来ましたよ。皆さん、電光  
掲示板にご注目！ さあ、一組目は：この  
2人！」  
会場中央の天井に吊るされた巨大電光掲  
示板に若いカップルが映し出される。  
実況アナ「さあ君たち、何をするかわかっ  
てるよね？ これはキスマーの時間だよ」  
若いカップル、照れながらもキスする。  
観客の歓声上がる。  
実況アナ「どうもありがとう！ 続いては：  
この2人」  
電光掲示板に老夫婦が映る。  
大爆笑。  
実況アナ「さあ、もうキスの仕方を忘れ  
ちゃったかな？」  
すると、男性、妻を思いきり抱きしめて  
熱烈なキスをする。  
会場にどよめきと歓声！  
実況アナ「素晴らしい！ 愛よ、永遠なれ！  
さあ、最後はこの2人！」  
一成と夏月が映し出される。  
一成・夏月「！？（固まる）」  
実況アナ「日本からのお客さんかな？：さあ  
何をするかわかってるね、これはキスマー  
の時間だよ」  
夏月「（ひきつって）ダメ、絶対ムリ」  
一成「（苦笑い）じゃあどうすんだ？」  
夏月「：：」  
実況アナ「日本人は人前じゃあキスしないっ  
て聞いたことあるけど、それと本当？  
でも、イチローならすると思うな。そうだ  
ろ、みんな！」  
観客の歓声！ なぜかイチローコールが  
沸き起こる。  
観客「イチロー！ イチロー！：」  
夏月の泣きそうな顔。  
一成「（小声で夏月に）いいから笑って。  
キスするフリをするから」  
夏月「えっ？」  
一成、夏月を抱き寄せて、彼女の唇に  
自分の手を押し当てて甲にキスする。

掲示板の映像的にはキスしてるように見える。

実況アナ「どうもありがとう！」

勇気ある日本人に拍手！！」

割れんばかりの拍手と大歓声。

笑顔で応える一成。

夏月も作り笑いで応える。

○パイク・ブレイス・マーケット

大勢の客で賑わう魚介類売り場。

夏月と一成、魚を選んでいる。

夏月「（英語で）キングサーモンの切り身と

車海老を下さい」

店員「（魚を選んで）全部で20ドル」

一成「（ポケットから財布を取り出し）俺が払う」

○一成のアパートメント・前

買い物袋を抱えた一成と夏月が

歩いてくる。

夏月の楽しそうな表情。

一成「ココだよ」

夏月「なんかドキドキしてきちゃった、男子

の部屋に入るなんて」

一成「酒の力も手伝って高揚している夏月。

一成「やめとく？」

夏月「（考えて）ううん：だってお料理作ら

ないとネ」

夏月、買い物袋を持って先に行く。

その様子を見つめる一成。

一成「（冷やかな笑み）……」

一成N「すべて法則通り：チヨロいもんだ、

とくに彼女みたいな優等生は』

○同・部屋の前

部屋の前まで来る。

鍵を取り出す一成。

一成N「今、僕の胸とのもう少し下の方に

あるモノは、期待と希望に張り裂けそうだ

った：』

一成、鍵穴をブスツと差し込む。

そしてドアを開く。

一成「どうぞ」

夏月「お邪魔します」

部屋の内奥にうつすらと灯り。

一成「？？？（部屋を見渡す）」

ソファに誰かが高イビキをかいて

寝ている。

一成「ハア!?」  
中年の女性だ。丸太のように太っていて  
髪の毛もボサボサ。  
人の気配に気づいて起き上がる。  
中年女性「フアアッ」  
一成「(驚き)!?」  
中年女性「(気づき) ああ、おかえり一成、  
いつの間にか寝ちやつたみたいね」  
一成「どうして、ココにいたんだよ?」  
中年女性「ゴールデンウィークだから遊びに  
来たの。入口で待ってたら大家さんが鍵を  
開けてくれて」  
一成「困るよ、来るなら来るって連絡しれく  
れないと」  
夏月「(一成に) 誰なの?」  
一成「あっ?」  
中年女性「(夏月に) この子の母親」  
美也子「(45)である。」  
夏月「お母さん!?」  
美也子「あなたは?」  
夏月「...」  
一成「あ、彼女は同じ大学の学生」  
夏月「坂本夏月です」  
一成「彼女が料理作ってくれるって言うから  
ほんのちよっとだけウチに来てもらうこと  
になったんだ。(夏月に) なあ」  
夏月「ハイ」  
美也子「一成を疑いの目で見る。  
美也子「フーン...ちよっと目を離すとコレ  
だ。相変わらずね、女癖の悪さは」  
一成「ハアっ?」  
夏月「(不安そうに) そうなんですか?」  
一成「(夏月に) いや、全然そんなことない  
って。この人の言うことデタラメだから」  
美也子「これで何人目、女連れ込むの?」  
母さんが知ってるだけでも(指折り数え  
て)一人、二人、三人...」  
一成「なに言ってるんだよ」  
夏月「(ますます不安な表情)」  
美也子「夏月の顔をじっと見る。  
美也子「あなた、まだバージンね」  
夏月「!?」  
美也子「レイプされなくなったら早く帰り  
なさい」  
一成「ハアッ!?」  
夏月「(一成に) 私、そんなつもりじゃな  
かったのに...あなたが手料理が恋しいって  
言うから...」

一成「いや、僕だってそんなつもり毛頭！」  
美也子「ウソおっしゃい！」  
一成「いや、だから：まったくなかった訳じゃないけど」  
夏月「じゃあ少しはあったってこと？」  
一成「：いや、だから：」  
夏月「そういうこと？」  
一成「：まあ、ちよつとは」  
夏月「（一成を睨みつけ）サイテー！」  
夏月、買い物袋をテーブルに叩きつけ  
部屋を飛び出していく。  
一成「：」  
部屋に残された母と息子。  
美也子、買い物袋の中の食材を見る。  
美也子「サーモンに、車海老に、ニンジンか  
：よし、ソテーにしよう」  
一成「：」  
美也子、キッチンに行き調理道具を  
探す。  
美也子「ねえ、フライパンどこ？」  
一成「：」  
美也子「一成、聞いてるの？」  
一成「（大声で）いい加減にしろッ！」  
美也子「何よ、その言い方。それが母親に對  
して：」  
一成「（遮り）いつもそうだ、突然現れて、  
僕の邪魔ばかりして！」  
美也子「邪魔って：あなた、もう少しでレイ  
プ犯になるところだったのよ」  
一成「ふざけんな、僕がいつレイプなんかし  
たよ？：そんなつもり全然なかったのに」  
美也子「ウソばかり！」  
一成「ウソじゃない！」  
美也子、一成に接近してその目をじっと  
見る。  
一成「な、何だよ？」  
一成「一成の目が泳ぐ。」  
美也子「その目は、彼女に隙あらばエツチな  
ことしようって考えてた目よ」  
一成「：（開き直って）別にいいだろ、僕だ  
って、もう子どもじゃないんだ」  
美也子「：」  
一成「ふつうの男なみに欲望だってあんだ：  
悪いか？」  
美也子「：」  
一成「もう、ほっといれくれッ！」  
美也子「：」  
沈黙。



いて眠る』

一成「写真の父を見つめる。」

一成N『でも僕は父のことを知らない。』

今から21年前、僕がまだ母さんのお腹の中にいた時に、父は飛行機事故でこの世を去ったからだ。』

美也子「寝返りを打つ。」

一成N『それ以来、母さんは女手一つで僕を育ててきた。女を捨て、僕の成長だけを生きがいにして。』

一成「美也子の寝顔をじっと見つめる。」

一成「……」

○ 一成の回想（アパートの一室）

小学生の一成、漢字を書く。

美也子「傍らにいる美也子、一成の手を叩く。」

美也子「書き順が違う、何度言ったらわかるのッ！」

一成「ゴメンなさい」

美也子「もう一回、最初から！」

一成N『母さんは僕のやること一挙手一投足に干渉してきた。』

就寝前、一成が布団に入ると美也子が

来て、枕元にカセットデッキに置く。

美也子「今日からコレを聴きながら寝るの

よ」

暗闇に英会話が流れる。睡眠学習法だ。

一成「（眠れない）……」

○ 小学生の一成「お願いだからほっといて」

○ 中学生の一成「頼むからほっといてくれ」

○ 高校生の一成「ほっといてくれて言っ

んだろッ！」

一成N『この言葉を、僕は何万回、口にした

だろうか？』

○ 一成のアパートメント（現在）

一成N『僕がシアトルの大学に留学したのも

そんな母さんの束縛から逃れたかったから

なのに。』

一成「……」

一成「美也子に毛布をかける。」

○ 同・食卓（朝）

朝食を食べる一成と美也子。

朝食を食べる一成と美也子。

朝食を食べる一成と美也子。

朝食を食べる一成と美也子。

朝食を食べる一成と美也子。

朝食を食べる一成と美也子。

朝食を食べる一成と美也子。

朝食を食べる一成と美也子。

朝食を食べる一成と美也子。

朝食を食べる一成と美也子。

朝食を食べる一成と美也子。

朝食を食べる一成と美也子。

朝食を食べる一成と美也子。

朝食を食べる一成と美也子。

朝食を食べる一成と美也子。

野菜がてんこ盛りのサラダボール。  
お互い目が合うが、すぐにそらす。

美也子「……」

沈黙。

美也子「どうなの、大学は？」

一成「楽しんでるよ」

美也子「そうじゃなくて勉強よ」

一成「そこそこやってる」

美也子「飛行機のエンジニアになるんでしょ

ちゃんとかやらないと仕送り止めるよ」

一成「……わかってるよ」

沈黙。

美也子、食べ終えて、

美也子「さあ、空港まで送ってくれる？」

一成「（驚いて）帰るの？」

美也子「そうよ」

一成「昨日来たばかりなのに？」

美也子「そうよ……うれしいでしょ、また女を

連れ込めるようになって」

一成「（ムツと）別にそんなじゃない」

沈黙。

美也子「私だって忙しいの。向こうに戻って

やらなくちゃならないこともあるし……」

一成「……」

○シアトル国際空港

出発ゲートに佇む一成と美也子。

窓の外に日航のジャンボ機が見える。

美也子「（じつと見つめる）……」

一成「（気づいて）乗れるようになったんだ

飛行機？」

美也子「これから何時間もアレに乗ると思う

と憂うつになる」

美也子「それじゃあ」

一成「うん」

美也子「もう二度と来ないから安心して」

一成「……」

美也子「身体に気をつけるのよ」

美也子、ゲートに消える。

○同・展望デッキ

日航ジャンボ機が飛び立つ。

一成「（機影をじつと見つめる）……」

一成N「子どもの頃から、よく母さんに連れ

られて飛行機を見に行った」

○シアトルの大学・教室

航空工学の授業。

一成「真面目にノートをとる。  
一成N『その頃から航空機のエンジニアになって、自分の設計した飛行機を大空に飛ばしたいと、そう思うようになったのは、もちろん父のことも、あったかもしれない』」

○同・カフェテリア

ランチを求める学生で賑わう。

一成「遠くに夏月の姿を見つけて近づいていく。」

一成「(夏月に)ねえ」

夏月「無視。」

夏月「(他の女生徒に英語で)向こうで食べましょう」

夏月「行ってしまおう。」

一成「……」

一成N『あの一件以来、夏月は僕と口を聞いてくれない』

○同・大教室

一成の左前方に座っている夏月。

一成「……」

一成「紙ヒコーキを夏月に向け飛ばす。」

その瞬間、誰かが窓を開けたので

風に煽られ、右旋回。

一成「あっ!？」

紙ヒコーキ、太ったソバカス顔の白人

女性の前に落下する。

白人女性「(笑顔で一成にウィンク!)」

一成「(苦笑い)……」

○シアトルの初夏・点描

2006年7月(字幕)

○大学・キャンパス

青々とした芝生に寝そべる一成。

ケータイでメールを打つ。

『坂元夏月さま

サマーキャンプどうする？

一緒に参加しない？』

送信する。

○同・階段

夏月「一成からのメールを見る。」

夏月「……」

外国人の男子学生が夏月に……

学生「（英語で）ナツキ、サマーキャンプ  
どうする？」

夏月「（英語で）まだ決めてない」  
学生「ゼミの仲間でポトランドに行く話があるんだけど一緒に行かない？」

夏月「…いいわね、そうしようかな」  
夏月、一成のメールを削除する。

○一成のアパートメント・前

一成、帰宅して郵便ポストを見ると、

一通の手紙が届いている。

差出人の名前は「橘川正悟」

一成「？…（知らない名前）」

○一成の部屋

一成、封を切って手紙を読む。

一成 N「前略、私は精神科医の橘川と申します。お母様がそちらに伺っていると聞いて手紙を書きました。」

手紙を読む声が橘川に代わる。

橘川 N「私は、20年ほど前からお母様を存じ上げていますが、最近連絡がとれなくなり心配しています。

お母様はお元気でしょうか？ ちよつと気になることがあります。もしお母様の様子を教えて頂けたら幸いです。連絡先は大阪府堺市…」  
一成「（手紙を読み終えて）何だろう、気になることって？」

○街角の公衆電話

一成、電話する。

何度かコールした後、留守電に切り替わる。

母の声「はい、行田です。ただいま出かけておりますのでメッセージをどうぞ。」

一成、電話を切り、今度は別のダイヤルを回す。

電話の声「ハイ、もしもし。」

一成「行田ですが、大家さんですか？」

電話の声「おおっ、一成くんか！ 元気にしてるか、海外はどうや？」

一成「ハイ、お陰さまで楽しくやっています。あの、ちよつと伺いたいことがあるんです。けど、家に電話しても母が出ないんです。母は何処かに出かけてませんか？」

大家の声「出かけるも何も、お母さんは一成くんの所に行くって言ってたけど。」

一成「えっ？」  
大家の声「2、3カ月の間、アメリカで過ご  
すって」

一成「……」  
大家の声「お母さん、そっちに行っていないの  
かい？」

一成「い、いいえ。こっちに来たことは来た  
んですが、そうですか、どうも突然電話し  
てすみませんでした（切る）」

電話の前に佇む一成。  
一成N「今思えば、突然シアトルにやって来  
た母さんは少しおかしかった……」

○大学の図書館

一成、本を探している。

本棚を挟んで向かいに夏月がいる。

夏月「！？（一成に気づく）」

夏月、隠れて一成の様子を伺う。

一成、一冊の本を手にして読む（英文）

その中に掲載された父の顔写真。

一成「（見て）……」

一成、本を棚に戻すと去っていく。

夏月「……」

その後、夏月がやって来て、一成が見て  
いた本を探す。

『1985年8月12日・B747SR  
航空機事故調査報告書』（英文）

夏月「航空機事故？」

ページをめくると、事故原因の記述と、  
犠牲者の顔写真が掲載されている。

アルファベット順に掲載された顔写真の  
中から『行田賢一』という名前を見つけ  
る。

夏月「行田？……」

○シアトル郊外・小高い丘

遠くにボーイング社の工場が見える。

一成、寝っころがって眺めている。

一成「（急に起き上がって）帰るか！」  
一成、丘を駆け降りる。

○一成のアパートメント・前

夏月、外から部屋の様子を伺っている。  
管理人がやって来て……

管理人「（英語で）何か、用かな？」

夏月「（英語で）このアパートに住んでる  
行田一成は？」

管理人「ああ、一成なら日本に帰ったよ」

夏月「！？」  
管理人「夏休みの間、向こうで過ごすって」  
夏月「……」

○ 京浜工業地帯の街  
古いビルが建ち並ぶ寂れた街。  
産業道路を大型トラックが行き交う。  
バスが停留所に止まり、一成が降りる。

○ 古い木造アパート  
一成、階段を上がって2階の部屋へ  
表札に『行田家』  
鍵を使ってドアを開ける。  
一成「たたいま」  
……と言ってみるが、返事がない。

○ 行田家・自宅アパート  
一成、居間のテーブルの埃を指でとる。  
一成「（埃が付着した指を見て）……」  
一成N『長い間、留守にしているようだ……』

○ 同・電話口  
受話器をもった一成。  
一成「（電話に）あつ、正彦おじさん？」  
一成です」  
正彦の声「おお、久しぶりだな！ 今どこだ？」

一成「川崎の自宅です、夏休みに戻ってきました」  
正彦の声「そうか」  
一成「それより母を知りませんか？」

○ 正彦の自宅（以下、一成とカットバック）  
正彦「あれ？：美也子はお前のとこ行っちゃって  
言っちゃったけど：行かなかったか？」  
一成「いや、来ましたけど、すぐに日本に  
帰ったんです：その後しばらく家にも帰って  
ないみたいで」

正彦「本当か？」  
一成「どこか、心当たりありませんか？」  
正彦「うーん：まあ、友だちと温泉にでも  
行ってるんじゃないか」

一成「……」  
正彦「お前を立派に大学まで入れて、ホッと  
したんだろ。だからあまり心配しなくても  
大丈夫だ」

一成「……」  
正彦「もう少し様子を見ようや」

一成「……」

○走る新幹線

車輪を映したCCDカメラ。激しい振動を伝える映像：もし脱線したら大惨事を招きかねない印象だ。

○新幹線・車内

一成、窓の外を眺めている。バッグから手紙を取り出す。

『橘川正悟 大阪府堺市堺区：』

○堺駅付近・点描

○古い雑居ビル内

一成、エレベーターを降りて、部屋を探す。

『橘川メンタルクリニック』の看板。

部屋のブザーを押すと、橘川（50）が

顔を出す。

無精ヒゲを伸ばし、つぶらな瞳、大きくて熊みたいな風貌である。

一成「行田です」

橘川「一成くん？」

一成「ハイ」

橘川「どうぞ、入って」

一成「お邪魔します」

○橘川クリニック・内

散らかった部屋。本や資料、食べかけのカップ麺や菓子類が散乱している。

橘川、ソファの週刊誌類を横にどけて

一成の座るスペースを作る。

橘川「2年前に女房に出て行かれてね、以来

この有りさま」

一成「……」

橘川「ずっと前から男がいたみたいで：自分の女房の浮気にも気づかなかった訳だから

精神科医としてどーなのよって感じなんだ

けどさ：まあ、座って」

一成「ありがとうございます（座る）」

橘川「冷蔵庫から缶コーヒーを2つ持っ

てきて、ソファの向かいに座る。

橘川「それで、お母さんと連絡は？」

一成「まだ、とれません」

橘川「そうか」

一成「あの、母とはどういう関係ですか？」

橘川「あっ：（精神科医と書かかれた名刺を

差し出し」橘川です」

一 成「精神科医？」

橘川「ハイ。お母さんとは今から20年前、墜落事故が起きた翌年に知り合いました」

一 成「じゃあ、母は心の病を？」

橘川「お母さんだけじゃない。あの悲惨な事故で大切な家族を失った多くの人たちが、深く傷ついてました」

一 成「……」

橘川「心のケアが必要と判断した医師会は、集まられるだけの精神科医やカウンセラーを集めて、遺族たちの心のケアに当たったんです」

一 成「……」

橘川「当時、新米だった私も駆り出されて、一度はお母さんと出会った。その後も年に一度は連絡を取り合っていたんだけど、去年から急に返事が来なくなってしまったんです」

一 成「……」

橘川「分厚い資料を取り出す。聞いたことありますか？」

一 成「急性悲哀シンドローム？いいえ」

橘川「例えば、大切な人が不治の病にかかって死ぬとする。その場合、家族は看病したりして、ふつう死に至るまでにある程度の時間的猶予がある。つまりその人を失うまでに心の準備ができる訳です」

一 成「……」

橘川「辛いとか悲しいとか思うこと自体がすでに心の準備になる。精神医学的にはね」

一 成「……」

橘川「ところが、飛行機事故などの場合だとそうはいかない。朝いつも通りに行ってきたと家を出て行った人間が、突然なんの前ぶれもなく死に至る。家族は辛いか悲しいとか、そんな感情を抱く以前に、最愛の人との関係を断ち切られてしまうんだ」

一 成「……」

橘川「コレはたまったもんじゃない。残された家族はなかなか現実を受け入れることができず、歪んだ精神状態に追い込まれてしまう」

一 成「それが急性悲哀シンドローム？」

橘川「……」

橋川「急性悲哀シンドロームにはいくつかのステージがある：」  
 第1ステージ：突然の訃報を聞いた時の激しいショック状態。  
 第2ステージ：事実を受け入れられず、全てウソだと否定する現実逃避。  
 第3ステージ：すべての人に向けられる怒りと攻撃性。  
 第4ステージ：人や社会との接触を避け、極めて不安定な抑うつ状態」  
 橋川「続ける。」  
 橋川「この急性悲哀には、それぞれのステージに応じた精神的ケアが必要になる。それがうまくいけば遺族たちは立ち直ることができる。やがて最愛の人の死を受け入れられるようになり『再社会化』、つまり日常の世界に戻っていくことができる」  
 橋川「ところがそれに失敗すると、遺族は非現実の世界、つまり故人との回想の世界で生きるようになる。やがて自己破壊に陥って、自殺に至るケースも少なくない」  
 橋川「！！？」  
 橋川「それで母の場合は？」  
 橋川「：お母さんの場合、急性悲哀の症状は見られなかった」  
 橋川「えっ？」  
 橋川「訃報を聞いた時のショック状態、現実逃避、怒り、抑うつ状態：どの症状もお母さんの場合見られなかった」  
 橋川「これは君のオジさんから聞いた話だがご主人の遺体が見つかった時も、お母さんは気丈に振る舞っていたそうです。周りの人にまで気をつかって：」  
 橋川「：：」  
 橋川「きっとお母さんはどんな時も冷静で、強い人なんだ、だから急性悲哀シンドロームにもならないんだと、最初は私もそう思ったんですけど、でも、実はそうではなかった」  
 橋川「お母さんに急性悲哀の症状が現れなかったのは他に理由があったからなんです」  
 一成「：：：なんでですか、理由って？」

橘川「言うか言うまいか悩んだ挙げ句、橘川「それは、あなたを身ごもっていたからです」

一成「えっ？」

橘川「事故当時、お母さんは妊娠4カ月で切迫流産の危険があった。お腹の子を守るためにお母さんはすべての悲哀を、あらゆる感情をもつことを拒絶したんです」

一成「……」

橘川「資料から一枚の紙を取り出します。橘川「コレはお母さんの日記のコピーです」

一成、その文面を見る。

橘川「お母さんは毎日、日記をつけていた。面会した時、見せてもらった日記の中に気になる文章があつて、それで悪いと思いつつもこっそりコピーさせてもらったんです」

一成、日記の日付を見る。

一成「1986年1月14日。僕が生まれた前日だ！？」

一成、母の日記を見る。

『もうすぐ生まれる。』

ケンちゃんのウソつき。生まれる時はぜったい立ち会つて言つたのに……』

橘川「ケンちゃんというのはご主人、つまり君のお父さんのことです」

一成「（続きを読む）」

美也子の声『私決めた。この子を産んで、立派に育てる。』

そして、この子が成人した時、

その時ケンちゃんのところへ行く。

だからあと20年、お腹の子が立派な大人になるまで頑張るから。

それまで待っててネ。いつも一緒だよ』

一成「20年って？」

橘川「君が二十歳だから、今年がちょうど20年目です」

一成「（不安）じゃあ母は……死ぬつもりってこと？……」

橘川「それはわからない……でも、急性悲哀は必ずしも事故直後に発症するとは限らない。事故から5年、10年経って発症したケースもある」

一成「……」

橋川「とにかく一刻も早くお母さんを見つ  
け出さない」と  
一成「（絶句）……」

○千里ニュータウン

一成、不動産屋と一軒の家の前まで来る  
木造建築の古い家。表札には『行田家』  
不動産屋「この家です。もう空き家になって  
だいぶ経ちますから、イタミもヒドくて」  
不動産屋「おばあさんがホームに入られてか  
ら一応ウチの方で管理を任されてるんです  
けど、これだけ古いとなかなか買い手もつ  
かなくて……さあ、どうぞ」

一成「すみません」

一成、中に入る。薄暗くて埃っぽい。  
一成N「父の実家。父と母は、事故に遭う前  
までの新婚生活をこの2階で過ごした。  
4年前まで父の母親、つまり祖母が一人で  
住んでいたが、認知症が進行して施設に  
移ったので今は空き家となっている」  
不動産屋「一成に鍵を渡す。  
不動産屋「用事が済んだら戸締まりお願いし  
ますね。それと鍵は事務所の方まで」

一成「ハイ」  
一成、玄関を上がると階段を上り  
2階の部屋へ。

○実家・2階の居間

：にやって来る一成。  
かしこに段ボール箱が積み上げられて  
倉庫のような状態になっている。  
壁にはマイケルジョーダンのポスター、  
本棚にバスケの大会トロフィー（千里北  
高校・県大会優勝）等が並んでいる。  
一成N「この部屋のどこかにきつとある……」  
一成、段ボール箱を開けて何かを探す。  
押し入れの中を探していると、  
大きな赤い箱を発見。  
中を見ると、十数冊の日記。

一成「あった!？」  
一成N「母の日記だ」

77年から85年まで、年ごとに色分け  
されて並べられている。  
一成N「同じメーカーの色違いの日記で統一  
されている。いかにも几帳面な母さんらし  
い……」  
一成、1985年の日記を手取る。

一枚の写真が挟まれていた。  
父と母の新婚当時の2S写真。

一成「(驚いて)コレが母さん!？」

一成N「若かりし頃の母さんの写真を見たのは初めてだった。まるで今とは別人で、往年のアイドルのような可憐さだ!」

写真の美也子は、黒髪を長く伸ばし、麦わら帽子に黄色いワンピースを着て微笑んでいる。

(時間経過)

一成、寝っころがって母の日記を読む。

ボールペンで書かれたきれいな文字。

一成N「母は2人の記念日をいろいろ作って

いた。誕生日や結婚記念日は当たり前、

初デートの日、初キッスの日、初めて2人

で旅行した日など、細々とした出来事まで

記念日にして2人で祝った!」

一成、日記のページをめくる。

### ○母の日記

美也子の声「3月15日。今日はケンちゃん

と私が初めて出会った日。

もうあれから3年が経つんだネ!」

### ○日記の回想(体育館・1982年)

美也子の声「あの日は神戸でバスケット大会が開か

れる予定だった!」

大雨が降っている。

「関西社会人バスケット選手権大会」の

垂れ幕。

選手もまばらで、22才の美也子は黙々

とシュート練習している。

場内アナウンス「大雨の影響でJRほか各鉄

道がストップしています。そのため参加で

きないチームも多数あり、よって本日の大

会は中止とします!」

美也子「(動きが止まり)えっ?」

美也子のチームメイトが集まる。

他のメンバ―①「もう最悪!」

他のメンバ―②「どうする、キャプテン?」

キャプテンの朋子(22)

朋子「:帰るしかないかあ」

メンバ―一同「そうね」

引き上げようとする美也子たち。

男性の声「ちよっと、すみません」

男性チームのキャプテンが声をかける。

胸に「篠原製作所」と。

キャプテン「あの、良かったら混合で試合し

「ませんか？」

美也子「そのメンバーの中の一人、賢一に目が止まる。」

賢一「……」

朋子「（皆に）どうする？」

他のメンバー③「（小声で）雨が強まりそうだから早く帰った方がいいんじゃない」

他のメンバーも賛成。

美也子「……」

美也子の声「『幸せになれるか、なれないか。』

その運命の分かれ道は紙一重だと思っ

もしあの時、私が黙ってたらケンちゃんと

結婚することもなかったし、こんな幸せに

なれることもなかった：私は直感的に思っ

た、このチャンス逃してはならないと』

美也子「きつと晴れるよ！」

他のメンバー「！？」

美也子「せっかく来たんだし、試合しよう」

朋子「そうよね、美也子がそう言うだったら

ねえ、みんな：（他のメンバーも賛成）：

（男子チームに）よろしくお願ひします」

男女混合のバスケットの試合。

美也子の声「私とケンちゃんは同じチームに

なった。ケンちゃんには大学の時、インター

ハイの大阪代表に選ばれたこともあるほど

抜群にバスケットがうまかった』

賢一、芸術的な3ポイントを決める。

見とれる美也子。

美也子の声「あの時、ケンちゃん自分シヨドウ

になつて、私がシュートしやすいうようにしてくれ

よね』

賢一、巧みなステップでゴールに切り込

むが、寸前で美也子にパス。どフリーの

美也子、難なくゴールを決める。

賢一「（美也子に）ナイスキュート！」

差し出された賢一の手に、美也子の手が

触れた瞬間。

美也子「！？（息が止まる）」

雨が上がり、きれいな夕日が見える。

美也子の声「その日の夕方、私が言った通り

雨は上がり、ウソのように晴れ渡った』

○日記の回想（居酒屋）

乾杯する美也子と賢一ら。

男性チームのキャプテンが美也子の隣に

来て：キャプテン「今日は楽しかった。本当にあり

美也子「い、いえ、こちらこそ」  
美也子「賢一の方を見る。」  
一人ポツンを飲んでる。酒が弱いのか  
既に顔は真っ赤で目は据わっている。  
女性メンバー①「（賢一の隣に来て）行田さんって  
国体の選手だったんですか？」  
賢一「ウイッす」  
女性メンバー②「それでうまいんだ！」  
賢一「ウイッす」  
美也子、賢一を見て微笑む。  
（時間経過）  
美也子の元に、突然ベロンベロンの賢一  
がやって来る。  
美也子「（驚いて）！？」  
賢一「隣、いいですか？」  
美也子「ええ、どうぞ」  
賢一、おぼつかない足取りで隣に座る。  
完全に泥酔していて、今にも意識を失い  
そうな状態。  
賢一「……」  
美也子「……沈黙。  
気まずい沈黙。」  
賢一「ハイ、行田さんでしたよね？」  
田。賢一は賢いに、数字の一」  
美也子「……はあ」  
賢一「あの、斉藤さんの下の名前は？」  
美也子「美也子です」  
賢一「どんな字？」  
美也子「美しいに、也（なり）に、子どもの  
子です」  
賢一「ちよつと待って下さい。忘れちゃうと  
いけないから……」  
賢一、テーブルにあつたナプキンにペン  
で書く。  
賢一「（メモを見せて）これで間違いないで  
すか？」  
美也子「ハイ」  
賢一「ついでに住所もいいですか？ 年賀状  
出しますから」  
美也子「？」  
美也子の声「まだ3月だった……」  
賢一「お願いします、住所」  
美也子「豊中市新千里3丁目……」  
賢一「豊中：千里：30丁目……」  
美也子「賢一、泥酔して書ける状態じゃない。  
美也子「自分で書きます」

美也子、賢一から紙とペンを奪い、自分で住所を書く。

賢一、座ったまま眠っている。

美也子「（ニコリと笑みを浮かべ）」

紙に電話番号と、ハートマークを書く。そして賢一の胸ポケットに紙を入れる。

賢一「（もうろうと）どうも！」

美也子「（笑み）……」

○日記の回想（美也子の部屋）

美也子の声「次の日、早速ケンちゃんから電話がかかってきた……」

電話で話す美也子。

賢一の声「昨日は大変失礼致しました」

美也子「何がですか？」

賢一の声「深酒してしまつて。何か無礼があつたのではないかと気になつて」

美也子「別に大丈夫ですよ、何もありませんでしたから」

賢一の声「そうですか：実はその：ちよつと待つて下さい」

美也子「……（電話の向こうでガサガサ音がある）」

賢一の声「今度の日曜日、もし美也子さんの都合がよろしければ、映画でも行きませんか？ 今セルシーで大変話題になつてる映画が上映されています。偶然にも私の上司からそのチケットを2枚頂きました……」

美也子「……」

美也子の声「紙に書いた文章を読んでもう一度読んだ」

賢一の声「如何なものでしょうか？」

美也子「うん、いいよ」

○日記の回想（映画館）

美也子の声「ケンちゃんの言っていた話題の映画というのはエンドレス・ラブ」

映画を観る美也子と賢一。

映画の中のラブシーン。

美也子の声「10代の禁じられた愛を描いた作品だが、ドロドロした展開が多くてあまり楽しめなかった。ブルック・シールズはキレイだったけどネ」

○実家・2階の居間

色あせた『エンドレス・ラブ』のポストカードが壁に張つてある。

一成「（見る）……」

日記の間から父と母の結婚式の写真が出てくる。

一成「(じつと見つめる)……」  
一成N「それから2年後の1984年、父と母は結婚した。2人の新生活は父の実家の2階部分：つまりココで始まったのだ」

○日記の回想(実家・2階の居間)

美也子の声「今日病院に行ったらお医者さんに「おめでとう、3カ月です」と言われたうれしくてケンちゃんの仕事場まで電話してしまった」

○日記の回想(お好み焼き屋)

食事する美也子と賢一。  
美也子の声「ケンちゃんはすごく喜んでくれて、その夜は2人でカンパイした。でも、ビールはグツとガマン。お好み焼きだけを食べた。ケンちゃんが「お腹に赤ちゃんがいるのだから2人分食べなきゃダメだ」と3人前注文した。そんなに食べられるわけないでしょ！：とつても幸せな一日」

○日記の回想(行田家・2階の居間)

帰宅した賢一、美也子に洋服を手渡す。  
美也子の声「6月2日、まだお腹がぜんぜん目立たないのに、ケンちゃんがマタニティを買ってきてくれた。気が早い。でもコレを着てると、なんだか母親の自覚が出てくるから不思議」

美也子、ぶかぶかのマタニティドレスを着て登場する。

美也子「どう？」  
賢一「うん、とつても似合ってる」

○日記の回想(セルシーデパート)

昭和60年頃のデパート風景。  
美也子の声「7月7日七夕。夕方、セルシーまでお買い物」

セルシー広場には大勢の店が並び家族連れやカップルで賑わっている。

ベンチでカキ氷を食べる美也子と賢一。  
美也子「ねえ、どんな名前がいいと思う？」

賢一「一のつく名前がいい」

美也子「一郎とか、浩一とか？」  
賢一「うん」

美也子「女の子だったら？」  
賢一「そうだな：一子（いちこ）とか」  
美也子「ええっ？ 嫌よ、そんな名前」  
賢一「バカ、そんなこと言ったら全国の一子  
さんに失礼だろ！」  
美也子「（驚いて）ゴメンなさい：：でも、  
やっぱ一子は嫌！」  
賢一「美也子、ベンチを立てて足早に行く。  
賢一「ちよっと走るんじゃない（追いかけ  
る）」  
美也子「（ムクれて）：：」  
賢一「まあ、君が嫌ならしかたがない。一子  
はやめよう」  
美也子「（見上げて）あつ、雨」  
賢一「こりゃ降ってくるな」  
やがて激しい雨になり、広場にいた人は  
一斉にデパートの中に逃げる。  
賢一と美也子も屋根のある所で雨宿り。  
賢一「誰か忘れてる」  
美也子「そのままにしといたら」  
賢一「でも放っておいたら濡れちゃうよ」  
賢一「大雨の中ベンチまで走っていく。  
そして紙袋を取ると、近くにいたガード  
マンに渡す。」  
美也子「（その様子を見つめる）：：」  
戻ってきた賢一は、まるで頭からバケツ  
の水をかぶったようにズブ濡れ。  
賢一「（美也子を見て微笑む）：：」  
美也子「（涙目）：：」  
美也子「賢一の胸に飛び込む。  
賢一「（驚いて）ちよっと濡れちゃうよ」  
美也子「いいの。ケンちゃんが濡れるんだっ  
たら私も濡れたい」  
賢一「：：」  
雨が上がる。  
展望台への階段を上がっていく美也子と  
賢一。途中で小休止する美也子。  
賢一「大丈夫？」  
美也子「やっぱり、少し身体が重くなってる  
みたい」  
賢一、美也子に手を差しのべる。  
美也子、賢一に引き上げてもらいながら  
一歩ずつ階段を上がっていく。  
展望台に到着する2人。  
西の空に真っ赤な夕日。  
美也子「風が気持ちいい：：」

美也子と賢一、手を繋いで夕日が沈むのを眺めている。  
美也子の声『真っ赤な夕日、吹き渡る風、そして傍らには優しいケンちゃん：私は何も世界に幸せな人間かもしれない。もう何もいらぬ。お金だつて食べていけないだけあればいい。だから、神様お願い、いつまでもケンちゃんと一緒にいられますように。私からケンちゃんを奪わないで下さい』

○セルシーデパート（現在）

大勢の買い物客で賑わう。

一成、デパート内を歩く。

一成「（店員に）すみません、セルシー広場は？」

店員「あちらのドアを出たところですよ」

一成、外に出ると目の前に広場。

ヨットハーバー風の公園。

幼児がミニ列車に乗って遊んでいる。

その様子をビデオで撮影する両親。

一成、ベンチに座る。

一成「……」

一成N『子供の頃、僕はこうした場所に来た記憶がない。遊園地、動物園、デパート：家族連れのないような場所を母は避けていたのかもしれない』

一成、幸せそうな家族を見つめる。

一成「……」

○同・デパート内

：から外に出てくる母と娘（後ろ姿）

娘、何かに気づいて立ち止まる。

母「（振り返って）どうなの？」

娘の顔が映る。夏月である。

夏月「ううん：ちよつと用事を思い出したから先に帰ってて」

母「夕食までには戻るのよ（行く）」

夏月、ベンチに座っている一成を見る。

夏月「……」

夏月、柱の陰に隠れる。そしてケータイ

を取り出しメールする。

『こんにちは、夏月です！』

夏休みはどうしてる？』

送信すると、一成の様子を見る。

一成、ケータイを取り出してメールを

見る。そして、すぐに返信する。

一成、ケータイを取り出してメールを

見る。そして、すぐに返信する。

夏月「一成のメールを受信する。  
『今、ニューヨークに来てます！  
ビレッジの公園で仲間たちと  
バスケット三昧の毎日だよーん』  
夏月「（読んで微笑む）……」  
そして、再び送信。

一成「受信したメールを見る。  
『良かった。それじゃあセルシー広場の  
ベンチで一人たそがれてるのは  
別人ね？』」

一成「（驚いて立ちがる）！？」  
周りを見渡すと、背後に夏月が立ってる  
夏月「（笑顔）ハイ！」  
一成「（苦笑い）……」

○同・展望台

一成「遠くの景色を眺めている。  
後方のベンチに夏月。」

夏月「日本だと大人しいんだね」

一成「（小声で）うるせえなあ」

夏月「ウチは神奈川県だったよね」

一成「……」

夏月「大阪には何しに？」

一成「別に。遊びに来ただけ」

夏月「もしかして飛行機事故と関係ある  
の？」

一成「！？」

一成「刺すような目で夏月を見る。」

夏月「ゴメンなさい。図書館で見かけたの、

あなたが飛行機事故のこと調べてるの」

一成「……」

夏月「それで犠牲者のリストを見てみたら、

その中行田って名前があったから」

一成「……」

夏月「お父さんなんでしょ？」

一成「……ああ」

夏月「……やっぱそうか」

一成「でも、父が事故に遭ったのは僕が生ま  
れる前の話だから。父のことは何も知らな  
いし、だから別に悲しくも何ともない」

夏月「……」  
一成「母の日記によれば、父と母は週末にな  
るとよくココに来てた。この展望台に上っ  
て2人で夕日が沈むのを眺めたって……それ  
がどんな場所か見てみたくなって、それで

来てみただけ。以上。さようなら！」

一成、行こうとする。

夏月「（呼び止める）ねえ！」

一成「（立ち止まる）……」

夏月「ウチ、ここからすぐなの。ちよつと寄ってかない？」

一成「……」

○夏月の自宅・一軒家

夏月の双子の弟（正太）と妹（祥子）

正太「夏月姉ちゃんが、男連れてきたんだって」

祥子「男！？」

母親の声「2人とも、夕食にするから降りてらっしゃい」

正太・祥子「ハイ」

○同・食卓

夏月の父（澄人）と母（恵子）

そして一成と夏月。

そこへ正太と祥子がやって来る。

恵子「（2人に）ほら、お客さんにきちんと

ご挨拶しなさい」

正太・祥子「（一成に）いらっしゃいませ」

一成「お邪魔してます」

正太「あの、ふつつかな姉ですが、よろしく

お願いします」

祥子「バカっ！ 結婚するんじゃないんだから余計なこと言わなくていいの！」

一同、笑い。

一成「お名前は？」

正太「正太」

祥子「祥子です」

一成「正太くんは祥子ちゃんか？ 僕は行田一成、お姉さんとは同じシアトルの大学に通

うお友達」

祥子「なんだ、恋人じゃないんだ」

夏月「こらっ、余計なこと言うと（ゲンコツ

をつくり）こうだぞッ！」

祥子「ゴメンなさい」

恵子「（料理を運んで）さあ食べましょう」

正太・祥子「いただきます！」

一成「いただきます」

一成、澄人をチラ見するが、新聞を広げて読んでるので顔が見えない。

一成「……」

もう一度、澄人の方を見る。

一成「……」

一成一成、新聞に顔を近づける。  
穴が開いていて、澄人と目が合う。  
澄人「一成、（お互い驚いて）！？」  
恵子「ちよつとあなた、新聞やめて」  
澄人「ああ（新聞を片付ける）：お母さん、ビールは？」  
恵子「冷蔵庫」  
澄人「ハイ、ハイ：自分でね」  
冷蔵庫に缶ビールをとりに行く。  
澄人「（一成に）君は飲めるか？」  
一成「：まだ二十歳ですから」  
澄人「なら飲めるじゃないか」  
一成「ええ、まあ：」  
澄人と一成、缶ビールで乾杯。  
一成「いただきます（飲む）」  
澄人「うーい（飲む）」  
恵子「（一成に）行田さんは大学で何を勉強してるの？」  
一成「航空工学です」  
恵子「じゃあ将来は？」  
一成「航空機の設計をやりたいと思ってます」  
正太「それって飛行機作るの？」  
一成「そうだよ」  
正太「すごい！」  
一成「でもなかなか狭き門で：まあダメでも整備士ぐらいにはなれたらいいなあと」  
澄人「（カットイン）そんな中途半端じゃダメだッ！」  
一成「！？」  
澄人「大事なのは決意だ。最後までやり切る決意と情熱だ！」  
夏月「：お父さん、やめて」  
澄人「すでに真っ赤。」  
一成「はや！」  
澄人「君はどんな飛行機を作りたいんだ？」  
一成「世界一安全な旅客機を作りたいです。たとえ片方の翼が折れても飛んでいられる旅客機。お客さんがまるでコウノトリの背中に乗っているような心地良い、安心感のある旅客機を作りたいんです」  
澄人「コウノトリのような旅客機か：素晴らしいじゃないか！ぜひ作ってくれ、お父さんのためにも」  
一成「！？」  
夏月「（小声で一成に）ゴメンなさい、しつこく聞かれたから話しちゃった」  
澄人「あのジャンボ機には私の会社の同期も

乗っていた」  
夏月「えっ、そうなの!?」  
恵子「結構亡くなってるのよ、関西の企業の方たちが。ちょうど大阪に戻る夕方の便だったから」  
澄人「期待してる、世界一安全な旅客機！」  
一成「ハイ」

○夜道

夏月「歩いていく一成と夏月。  
ゴメンね、父が余計なことばかり言うて」

一成「そんなことないよ、良いお父さんじゃないか。だって言っても父親がどんなものか知らないんだけどさ」

夏月「……」

一成「でも、なんかいいね」

夏月「何が？」

一成「お父さんがいるってさ。うちはいつも母と2人きりだったから」

夏月「……」

一成「日本にいとダメだね、湿っぽくなっちゃって」

夏月「……いつまでいるの？」

一成「さあ。母が見つかるまでかな」

夏月「（驚いて）お母さん、いなくなったの？」

一成「5月にシアトルに来てから行方がわからない」

夏月「（心配そうな顔）……」

一成「大丈夫、きつと温泉にでも行ってるんだと思う」

駅に着く2人。

一成「じゃあ、今日はどうもありがとう！」

一成、笑顔で手を振り、駅へと走っていく。

夏月「……」

○電車の中

車窓を流れる夜の町。

一成「（悲しい瞳）……」

○大阪港

フェリーが出港していく。

○フェリー・デッキ

……に一成と橘川。

橘川「（書類を見て）榎木豊さん。今年で58才になる」

橘川「ああ。榎木さんは地域医療に取り組む医師だった。あの日は家族で東京に遊びに行つた帰りで、榎木さんだけ診療があるの。一日はやく帰つたために事故を免れた」

一成「じゃあ家族は？」

橘川「奥さんと、小学生の息子さん、娘さんの3人があの飛行機に乗っていた」

一成「……」

橘川「榎木さんと君のお母さんは、遺族会で知り合つてからずっと文通を続けている。もしかしたらお母さんの行方を知っているかもしれない」

○海を臨む老人ホーム

その庭園にいる車椅子の榎木。とても50代には見えないほど老け込んでいる。

橘川と一成がやつて来て：

橘川「（榎木に）こんにちは、先生」

榎木「おお、久しぶりじゃな、橘川くん」

橘川「橘川、隣にいる一成を紹介する。」

橘川「こちらは美也子さんの息子さん」

一成「行田一成と言います」

榎木「おお、美也子さんの……そうか、お母さん

んは元気にしとるか？」

一成「……」

橘川「実はちよつと行方がわからなくなつて

まして……それで先生なら美也子さんのこと

何かご存知かと思ひまして」

榎木「わからないな……ああ、女房なら何か

知つてるかもしれない。今夜の飛行機で

女房と子ども達が帰つてくるから聞いてお

こう」

一成「……？」

橘川「（遮つて）お願いします、ぜひ聞いて

みていただけますか？」

一成「……」

榎木「わかつた。コーヒー飲むかね？」

橘川「ハイ、いただきます」

榎木「ハイ、いただきます」

注いで2人に手渡す。

榎木の着ている女物の赤いTシャツ。

かなりボロボロに痛んでいる。

一成「（見て）あれは？」

橘川「（小声で）奥さんのものだ……先生の中

ではまだ奥さんも子ども達も生きてる」  
一成「……」

看護師「やって来て」

看護師「そろそろお昼寝の時間です」

榎木「そうか、じゃあ女房たちが帰ってくる

まで一眠りするとしよう」（橋川らに）

ゆっくりしてつてくれ。ココから見ると夕日

は最高だ」

橋川「ありがとうございます」

榎木「去り際に、

榎木「（一成に）君はいくつだ？」

一成「二十歳です」

榎木「……私も若い時分にはガムシヤラに仕事

した。それが女房、子どものためだと思っ

てな」

一成「……」

榎木「でも、本当はそうじゃなかった。仕事

にかまけてただけだ。私はもつと家族との

時間を大切にすべきだったんだ」

一成「……」

榎木「去っていく」

○ 帰りのフェリー  
デッキで海に沈む夕日を見つめる一成。

コールタイを取り出し、電話する。

○ 行田家・自宅アパート  
誰もない部屋にコール音。

やがて留守電に切り替わる。

○ フェリー  
デッキに佇む一成。

○ 実家・2階の居間  
寝っころがってバスケットボールを天井

に向けて投げる一成。

一成N「読み進めてきた母の日記が8月に

入った。もうすぐあの日を迎える……」

美也子の声「8月1日。朝からつわりがひど

く、ケンちゃんを送り出した後、横になっ

た……」

○ 日記の回想（行田家・実家の2階）

美也子の声「横たわる美也子」

美也子の声「寝ているとさらに気持ち悪く

た……」

○ 日記の回想（行田家・実家の2階）

美也子の声「横たわる美也子」

美也子の声「寝ているとさらに気持ち悪く

た……」

なつてきて立ったり横になつたりのお繰り返  
し。もう最悪！』  
チャイムが鳴る。美也子、玄関を開ける  
と、朋子らバスケ仲間数名が。  
朋子「よおッ！」  
美也子「（驚いて）みんなあ！…」  
美也子の声『そうこうしていると、トモたち  
が遊びに来てくれた』  
朋子「具合どう？」  
美也子「…うん、みんなの顔見たら元気にな  
った。上がった」  
全員「お邪魔します！」  
朋子「ビデオテープをセットする朋子。  
美也子「日曜日の試合、ビデオに撮ったの」  
朋子「ミツちゃん、見たい。見せて、見せて」  
張ったんだから」  
隣にいる真子。  
真子「そうよ、おかげで足はくじくは、突き  
指するで大変だったんだから」  
朋子「試合には負けるしね」  
真子「ええっ、私のせい？」  
全員「決まってるじゃない」  
真子「エーン（泣きまね）」  
美也子「まあまあ…とにかくビデオ見よう」  
ビデオを再生する。  
朋子、ドリブルで攻め上がる。  
朋子「（美也子に）見てて、ココが問題の  
シーン」  
朋子、真子にパス。  
美也子「（映像を見て）ちよっと待って、今  
のトラベリングじゃない？」  
朋子「スローモーションでもう一度」  
真子「もうやめてッ！」  
真子のシュートをスローで再生。  
パスをもらった後の真子の歩数を  
みんなので数える。  
全員「1歩、2歩、3歩、4歩、5歩、6歩  
7歩！？」  
美也子「真子、歩きすぎ！」  
真子「（泣きそうな顔）ゴメンなさい！」  
全員、大爆笑。  
朋子「やっぱミツちゃんがいないとダメね、  
ウチのチームは：丈夫な赤ちゃん産んで、  
はやく戻ってきてね」  
美也子「…うん。みんな、ありがとう」

○日記の回想（実家の2階）

美也子、料理を終えて時計を見る。

7時5分、玄関のチャイムが鳴る。  
美也子の声『7時5分ちょうど、定刻通りにケンちゃんも帰ってきた』

賢一「朝、ひどかったじゃないか」

美也子「あ、なんか楽しいことがいっぱいありすぎて忘れちゃった」

賢一「そう（食べる）」

美也子「うん、美味しい」

賢一「（気づいて）良かったあ（喜ぶ）」

美也子「（気づいて）つわりは？」

賢一「朝、ひどかったじゃないか」

美也子「あ、なんか楽しいことがいっぱいありすぎて忘れちゃった」

賢一「（気づいて）つわりは？」

美也子「あ、なんか楽しいことがいっぱいありすぎて忘れちゃった」

賢一「（気づいて）つわりは？」

○実家の2階

一成、日記をめくる手が止まる。

一成「（乗って）……」

一成「……」

一成「（気づいて）ついにあの日が来た……手が震えた……」

一成、日記を閉じると部屋を飛び出す。

○通り

……に出てタクシーを拾う一成。

一成「（乗って）……」

運転手「お客さん、どちらまで？」

一成「（何か思い付いて）空港へ。空港へ行って下さい」

走り出すタクシー。

○空港・展望デッキ

飛行機を眺めている母と幼児。

轟音とともに離陸する。

幼児「（飛行機に手を振り）バイ、バイ」

少し離れたベンチに一成。

一成「……」

日記を手にとり、ページを開く。

○日記の回想（実家の2階）

小雨の降る朝。

美也子の声『その日は朝から小雨がパラついていて、東京への日帰り出張はいつものこととで、別段いつもと変わらない朝だった』

賢一、身支度を整えて玄関へ。

パジャマ姿で見送る美也子。

賢一「8時には帰れると思う」

美也子「うん、気をつけて」

賢一「お前も無理しないで寝とけよ」

美也子「うん」

賢一「行ってくる」

美也子「賢一にキス。」

美也子「行ってらっしゃい」

賢一の姿が見えなくなる（スロー）

美也子「……」

○日記の回想（スーパー・内）

：を歩く美也子。

美也子の声『午後になつて雨が上がったので

近くのスーパーへ買い物に出かけた』

美也子が店の外に出た時、オバさんたち

の話し声が聞こえてくる。

2人は上空を見上げて：

オバさん①「初めてやわ、あんな変な雲」

オバさん②「気味わるっ」

美也子も空を見上げる。

奇妙な形をした黒い積乱雲。

美也子「……」

○日記の回想（行田家・実家の2階）

料理をする美也子。

テレビから天気予報。

アナウンサー『大阪地方の天気をお伝えしま

す。雨を降らせていた前線は東に移動し、

今夜から明日にかけては晴れ模様：』

美也子「視界良好！：よし、できたっ」と

美也子、料理をテーブルに並べる。

そして、テレビのスイッチを切る。

時計を見ると、午後7時50分。

美也子「もうそろそろかな：（ベランダから

下を見る）」

駐車場には車が止まっていない。

美也子、部屋に戻って雑誌を読む。

（時間経過）

時計が8時30分を過ぎる。

美也子「？：」

もう一度ベランダから下を見るが、

駐車場は空のまま。

美也子、急に膝がガクガクと震え出す。

美也子「……（おかしい）」

美也子、何とかソファに戻る。

美也子「どうしちゃったんだろう？」

その時、電話が鳴る。

美也子「ケンちゃんからだ！（電話に）ハイもしもし」

女性の声「篠原製作所の伊藤と申します。

美也子「いえ、まだですが：事務所に寄って

ませんか？」

女性の声「：いいえ」

美也子「そうですか」

女性の声「：奥さん、テレビつけてもらえま

すか？」

美也子「テレビ？ ちょっと待って」

美也子「テレビをつける。」

○テレビ画面

アナウンサー「先ほどからお伝えしています

通り、羽田発大阪行きジャンボ機123

便が今夜消息を絶ち、墜落した可能性が

強まっています。繰り返します：」

美也子「！？」

美也子「思わずお腹を手で押さえる。

受話器から男性の声が聞こえてくる。

受話器「（大声で）もしもし、奥さん！

聞こえますか！ 大石です！」

美也子「もしもし」

大石の声「ああ、奥さん！ 賢一くんと同じ

開発部の大石です。わかりますか？」

美也子「ハイ」

大石の声「賢一くんがあのジャンボ機に乗っ

ていたらしいんです」

美也子「！？」

大石「落ち着いて下さい。まだ詳しいことは

何もわかってませんから：とにかく奥さん

は無理しないで。会社で動きますから」

美也子「受話器を置くと、その場にうず

くまる。」

美也子「（お腹の子に）パパはきつとどこか

に不時着してる。今、救助の人が向かって

るから：パパは絶対に大丈夫だから：」

美也子「そう言いながらも美也子の目から

ポロポロと涙が落ちてくる。」

義父「1階から賢一の両親がやって来る。

義父「おい、賢一は帰つとるか？ 今日東京

飛行機に？」

美也子の泣いてる姿を見て。

義父「乗つとったんか！？」

義母「（泣き崩れて）賢一！！」  
美也子「（義母を介抱し）お義母さん、大丈夫、賢一さんは必ず生きてますから」

（時間経過）

大勢の人たちが集まって待機。

美也子の声「その後、正彦兄さんや会社の人たちが続々とやって来た：ニュースの報道で飛行機は関東周辺の山中に落ちたことがわかった」

大石「電話を切っている。」

3人まで現地に行けるそうです」明日の一日で

美也子「私行きます」

正彦「お前はダメだ。ただでさえ流産の危険があるのに、もしものことがあったらどうする」

美也子「……」

正彦「とにかく俺が行って様子を見てくるから、それまでココで待ってろ」

大石「私も行きます。（美也子に）奥さん、気を強くもって。アイツはしぶとい奴だから、必ずどこかで生き延びてる」

美也子「（笑顔で）うん」

玄関のチャイムが鳴る。

美也子が出ると、朋子が立っている。

朋子「テレビでケンちゃんの名前見たんだけど……まさか……」

美也子「うん、そうよ……でも、どこかに不時着して無事だと思っ」

朋子「……そうよね。ケンちゃんのことだからきつとそうに決まってる……（涙が溢れてきて）ゴメンなさい、なんだか勝手に……」

美也子「朋子を優しく抱きしめる。」  
美也子「ありがとう、来てくれて」

美也子「美也子も涙が溢れる。」  
美也子の声「トモは朝までずっと一緒にいてくれた。あの時トモがいてくれたおかげで私はどれだけ救われたことか……」

○空港・展望デッキ  
ベンチで日記を読む一成。

一成N「毎年の一枚のハガキを出す。」  
一枚の年賀状……」

差出人は「竹下朋子……その下に大阪市内の住所が書いてある」

一成N「竹下朋子……日記に度々登場するトモというのは、おそらく彼女のことで……」

○夜の住宅街

一軒の家の前に一成がやって来る。

表札に「竹下」

一成「チャイムを押す。」

インタールホン「どちらさまでしょうか？」

一成「あの、行田といいますが：竹下朋子さ

んのお宅でしょうか？」

インタールホン「：：（沈黙）」

玄関のドアが勢いよく開き、朋子が飛び出して来る。

朋子「（じっと見つめて）一成くん？」

一成「そうです」

朋子「両手で口元を押さえ。」

朋子「（涙声で）こんなに大きくなって：」

一成「母のバスケ仲間のトモさんですよ」

朋子「ええ、そうよ」

一成「夜分遅くにすみません。実は母のことでお伺いしたいことがあって：」

朋子「とにかく上がって」

○朋子の家・居間

朋子「古い写真を一成に見せる。」

一成「コレが：ボク？」

朋子「そうよ、私が撮ったの」

一成「（驚いて）！？」

朋子「あの日は雪の降る寒い夜で、陣痛が始

まつてもなかなか生まれなくてね、結構、

難産だったのよ」

一成「じゃあ朋子さんは、ボクの出産に立ち

会ってくれたの？」

朋子「うん。賢一さんの代わりにミツちゃん

の手をずっと握りしめて：ようやく生まれ

たのは朝の5時過ぎだった」

一成「：：そうだったんですか：（改まって）

そのせつはどうもお世話になりました」

朋子「ちよつと、ヤメてよ」

笑いが起きる。

朋子「それでミツちゃん、元気なの？」

一成「（表情が曇る）：実は、3カ月前から

行方がわからなくなってます：」

朋子「！？」

一成「それで、朋子さんならどこか心当たり

があるんじゃないかと思って」

朋子「（首を振り）ゴメンなさい」

一成「：：」

朋子「お母さんとはもう10年以上会ってな

いの。手紙のやりとりはしてただけど、そのうち返事が来なくなつて」

一成一成「……」

朋子「何度も会いたいつて言ったんだけど、意図的に私や昔の仲間を避けてるようにも思えて」

一成一成「……」

朋子「ゴメンなさい。お母さんを悪く言うつもりはないのよ」

一成一成「わかつてます：母の日記を見たんです。母は朋子さんにはとても感謝してました」

朋子「そんなこと……」

一成一成「あの、母のことを：事故が起きた後の母の様子を覚えてくれませんか？」

朋子「！？」（表情が曇る）」

一成一成「日記も事故後のことはあまり書いてなくて：母を探す手がかりになると思うんです」

朋子、重い口を開く。

朋子「事故現場には、ミツちゃんのお兄さんや会社の人が行ったんだけど、賢一さんはなかなか見つからなかったの。機体の損傷が激しかった前の方の席に座ってたから：事故から5日経つて、もうミツちゃん居ても立っててもいられなくなつて……」

### ○朋子の回想

行田家・実家の居間

美也子「義父と口論。傍らにいる朋子。」

美也子「どうして私が行つちやいけないの？」

私が行けば賢一さんを見つけれぬのに」

義父「今さら、あの地獄のような所にお前が行つたトコで、どうなるものはおまへん」

美也子「それ、どういう意味？」

義父「……」

泣き崩れる義母。

美也子「彼が、死んだつて言うの？」

義父「警察や地元の人があれだけ探して見つ

からへんのやから」

美也子「探し方が悪いのよ。私が行けばすぐ

に見つけられる」

義父「無駄や！ 仮に見つかったとしても、

事故からもう5日も経つとる！」

美也子「……」

義母、号泣する。

美也子、身支度を始める。

美也子「私、行きます」

朋子「美也子のそばに行き、  
朋子「ミツちゃん、もう少し待とう」  
美也子「彼の声が聞こえるの。はやく迎えに  
来てって」

朋子「でも、お医者さんに言われてるでしょ  
切迫流産の危険があるって：今、無理して  
山に行ってお腹の赤ちゃんにもしものこと  
があったらどうするの？」

美也子「：：：」  
朋子「一番悲しむのは賢一さんよ」

美也子「！？（荷造りする手が止まる）」  
朋子「（美也子の手をとり）お兄さんたち  
だって必死に探してる。きっと見つかるか  
らココで一緒に待とう」

美也子「：：：」  
朋子の声「結局、賢一さんが見つかったのは  
事故から10日後のことだった」

### ○朋子の回想

（壁が黒い布で覆われている体育館）

美也子、正彦に付き添われて一つの棺の  
前まで来る。義父と義母、朋子が続く。  
朋子の声「ミツちゃんは、羽田に設けられた  
遺体安置所で賢一さんと対面した：：」

正彦「賢一くんだ」  
美也子「：：：」

正彦、棺を開ける。すると全身包帯で  
グルグル巻きにされた賢一の遺体。

美也子「ケンちゃん：：」  
美也子「顔を覗き込んで優しく触れる。」

美也子「顔が見たい」  
正彦「ダメだ」

美也子「どうして？」  
正彦「女、子どもには見せないことになっ  
てる：何より今のお前にはショックが大き  
すぎる」

美也子「でも、見たいの」  
義父「それは賢一も望んどらん。優しく  
男前やった時の賢一だけを心に刻み  
つけて

おけばええんや」  
美也子「：：：」

正彦「そろそろ茶毘の時間だ。出よう」  
美也子、正彦に連れられて出て行く。

美也子「（悲しい目）：：：」  
出口で振り返り、賢一の棺を見つめる。

朋子「（美也子を見る）：：：」

○ 朋子の家・居間

一 成と朋子。

朋子「これは私も後で知っただけけど……」

一 成「……」

朋子「実はあの遺体は、ほとんどが段ボールで作られたものなの」

一 成「えっ？」

朋子「見つかかった賢一さんの遺体は、鼻から下の顎の部分と、左足の太腿だけだった。

でも、それでは妊婦のミツちゃんがショツクを受けるだろうって、看護師さんたちが

段ボールと包帯で人型に整えたの」

賢一の遺体（インサート）

一 成「そんな：母はそのことを？」

朋子「わからないけど……知ったのはおそらくあなたが生まれた後だと思う」

一 成「……」

鳩時計が午後10時を告げる。

鳩時計が午後10時を告げる。

○ 同・玄関（夜）

一 成を見送る朋子。

朋子「何かわかったら連絡するから」

一 成「お願いします」

朋子「一 成くん、これだけは覚えておいて……

もし、あの時あなたがお腹にいなければ、

ミツちゃんは賢一さんの後を追って死んで

いたと思う」

一 成「……」

朋子「ミツちゃんは、あなたがいたから今日

まで生きてくれた。だから、これからも

お母さんを支えてあげてね」

一 成「（頷く）……お邪魔しました」

一 成、去っていく。

○ 行田家・自宅アパート  
暗闇に鳴り響く電話。

○ ビジネスホテル

ケータイで電話する一 成。

コール音が続く。

一 成「（虚空をみつめる）……」

○ 羽田空港（朝）

ジャンボ機が着陸する。

○ ジャンボ機・機内

アナウンス「当機はただいま羽田空港に着陸

しました。東京の天候は晴れ……」

一成「目を開ける。」

一成「（大きく息を吐く）……」

○東京モノレール  
東京湾沿いを走る。

○モノレールの駅

一成、改札口を出ると

安東「初老の男性（安東）が声をかけてくる。」

安東「行田一成さん？」

一成「（少し驚いて）ハイ」

安東「航空安全センターの安東と言います。」

本日はよろしくお願いします」

一成「（会釈）こちらこそ」

安東「行きましよう。ココから歩いてすぐですから」

○倉庫街

：を歩く一成と安東。

安東「（突然）お母さまはお元気ですか？」

一成「（驚いて）母を知ってるの？」

安東「ハイ。事故当時、お母さまの世話役を

務めておりました」

一成「でも、どうして僕が遺族だと？」

安東「安全センターを見学するには、事前に

予約が必要ですからね」

一成「！？」

安東「実はちよつとお話があります。見学を終えたら結構ですので、少しお時間頂けますか？」

○航空安全センター・内

墜落した旅客機の尾翼。

変形した座席。

破損した圧力隔壁などが展示。

見学する一成。

一成N「航空安全センターには、事故機の機体や事故原因とされる後部圧力隔壁などが展示されている。僕は航空機的设计を志す者として、また遺族としても、この事故の全容を知っておきたかった」

ガイド、見学者に展示物を紹介する。

ガイド「これが事故原因とされる圧力隔壁です。この部分の損傷が油圧系統に重大なダメージを与え……」

一成「（聞いてる）……」

一成N「わかりやすく言うと、飛行機も風船

と同じだ。一カ所でも穴が開いたら、そこから空気が漏れ出して機体は大きな損傷を受ける。そのため旅客機の内部は圧力隔壁と呼ばれる分厚い鉄の板で覆われているのだ』

機体の構造を表すCG。  
一成「墜落したジャンボ機は、以前尻もち事故を起こし、後部の圧力隔壁に大きな穴が開いた。そして、事故原因となるトラブルは修理の時に起こった。隔壁の穴を塞ぐために縦1・5m、横幅5cmの鉄の板が宛てがわれたが、コレは規定の横幅よりも数センチ短かったのだ。そのため2列のポルトで固定しなければならぬ鉄板を1列でしか固定できなかった。結果、事故機は飛行中に鉄板が外れ、穴の開いた風船のように噴き出した空気が尾翼を吹き飛ばし、大事故に至った。もし修理に使った鉄板の横幅があと数センチ長かったら、大惨事は免れたのだ』

一成の元に説明が終わる。  
安東「どうぞ、こちらへ」

○同・応接室

安東「書類を一成に差し出す。」

一成「補償金の受取確約書です」

安東「補償金？」

一成「一成さんが二十歳になった時に、受け取るようになってます」

一成「確約書の金額を見て、」

安東「一千万円！？」

一成「そうですね」

安東「どうして僕が？」

一成「お母さまから何もお聞きになっていないんですか？」

安東「はい」

一成「いかにもお母さまらしい」

安東「どういうことですか？」

一成「（間）：あれは事故から半年ぐらい経った頃でしょうか？」

○安東の回想

行田家・実家の2階

ベビーベッドで眠る赤ん坊（一成）

安東の声「私たちはお母さまと事故の補償に

関する話し合いを始めました：」

安東「補償金額は、亡くなられた方の年令や社会的地位、年収などを考慮して換算されます。ご主人の場合ですと……」

美也子「（遮り）お金は要りません」

安東「ハア！？」

美也子「主人の命を、お金なんかにかえられませんか。帰って下さい」

安東「でも……（赤ん坊の方を見て）一成くんのこともありますし、お金がないとこれからの生活に支障が……」

美也子「いいから、帰って！」

安東「……また出直します（席を立つ）」  
その時、1階から賢一の両親がやって来る。

義父「（安東に）おい、わいら抜きで話する  
いうのは、どういう見や？」

義母「そうや。賢一と嫁との付き合いはたか  
だか2、3年やけど、わいら賢一とは28  
年間もずっと一緒やったんやから」

美也子「！？……」

安東「……」

### ○安東の回想

行田家・実家の一階・居間  
安東を取り囲む義母・義母・親戚の男。

安東の声「そのうち親戚だと言うヤクザまが  
いの男が乗り込んで、補償金をつり上  
げてきた……」

男が「こんなハシタ金じゃ話にならねえ  
ッ！」と安東に怒号を浴びせる。

安東「……」

美也子、赤子を抱いて、ポツンと離れた  
場所にいる。

美也子「（苦渋の表情）」

安東の声「お母さまにとつては、最愛の人を  
亡くした上に、その命の代償として支払わ  
れるお金のことで揉めるのはとても耐えら  
れなかつたのでしよう……だから、すべての  
権利を放棄して、お母さんはあなたを連れ  
て家を飛び出してしまつたんです」

### ○航空安全センター・応接室

一成と安東。

一成「それじゃあ、母は補償金を一銭も？」

安東「ええ、受け取ってません」

一成「……」

安東「お母さまは、さぞ大変なおもいを……」  
一成「昼間はレストランで働いて、夜はビル

の清掃の仕事をしてました。ずっと働きづめの毎日でした」

安東「それでしたか」

安東「確認書を差し出し、

安東「これは私が賢一さんのご両親に、せめてお孫さんにあたる一成さんは受取人にす

べきだと頼み込んで、ようやく判を押して

もらったものです。補償金のほんの一部で

すが、どうかお納め下さい」

一成「……」

○行田家の自宅アパート・前

一成「アパートの階段に座っている。

一成「……バカだよ、母さんは」

ケータイのメール音。

見ると、夏月から。

『こんにちは。いま何処？』

まだ大阪にいるの？』

一成、メールを返信する。

『やつとニューヨークに来ましたあ！』

こっちは最高だよッ』

再び夏月からのメール

『良かった。じゃあアパートの階段で』

一人たそがれてるのは別人ね』

一成「！？」（立ち上がって周囲を見渡す）」

アパートの入口に夏月が立ってる。

夏月「（笑って）二度もダメされるなんて、

単純すぎッ！」

一成「……」

一成「夏月のことをじっと見つめる。

夏月「別に勘違いしないでね。家族みんな

デイズニールランドに来た帰りに、ちよつと

寄ってみただけだから」

一成「いきなり夏月を抱きしめる。

夏月「きゃあッ（小さな悲鳴）」

一成「お願いだから、しばらくこのまま」

夏月「……」

一成「……」

夏月「お母さん、見つかってないのね」

一成「……」

夏月「いいよ、私は」

一成「……」

夏月「一成くんがそうしたければ……」

一成「……」

一成「僕は、人をちゃんと好きになつたことがないんだ。だから君にはふさわしくない。」

夏月「またずいぶんと謙虚になつたモンね。」  
一成「でも、いつか君にふさわしい男になりたいと思つてゐる。君のことをきちんとして愛せる人間になりたい。」

夏月「……」  
一成「それまで待つてくれる？」

夏月「うん、いいよ。」  
抱き合う二人。

○同・一成の部屋

一成「N」母の日記が終わりに近づいてきた。最後の方になると夢の話が頻繁に出てくる。」

○日記の回想（夢のイメージ）

美也子の声「1月5日。昨夜、夢を見た。朝、出かける時に彼がキスしてくれた。温かくて、情熱的なキス。ずっと夢の中にいたい。夢から覚めるのが一番嫌ッ！」

美也子の声「1月24日。クリスマススイブに彼の夢を見た。街を歩いていると、人ゴ

ミの中から急に彼が現れた。  
「やっぱり生きてたんだね！ 今までどうして連絡してくれなかったの！」

彼にしがみついて思いきり泣いた。  
自分の泣き声で目が覚めた。」

○行田家・自宅アパートの一室

一成「N」日記は、事故翌年の1月14日、僕が生まれる前日に終わっている。」

○日記の回想（産婦人科）

病室にゐる美也子。  
窓の外に雪を見つめている。  
美也子の声「1月14日。病院に入る。すべて正常。出産の準備も整つた。昨夜、彼の夢を見た。」

丘の上に彼が立っている。」

○日記の回想（美也子の夢イメージ）

漆黒の夜、緑の丘に賢一が立って笑顔で手を振る。

美也子「ケンちゃん！（手を振る）」

そして丘の上に登ろうとするが、

身重の美也子はなかなか登れない。  
それでもなんとか丘の上まで来るが

賢一の姿が見えない。

美也子「（周りを見回し）ケンちゃん？：

ケンちゃん、何処にいるの？」

すると空から真っ赤なバラの花びらが

落ちてくる。

美也子「（空を見上げて）ケンちゃん！？」

次々と降ってくるバラの雨。

賢一の声「（空から）わかってるだろ」

美也子「（天に向かって叫ぶ）わかんないよ

ケンちゃん。死ぬ時は一緒だよって言って

たのに：どうして、私だけ一人ぼっちにす

るの！」

やがて、美也子の周りにバラの花が

降り積もっていく。

美也子「（天に）ケンちゃん！」

バラの花びらが、美也子の膨らんだお腹

の上に落ちる。

美也子「（見つめて）ケンちゃん！」

美也子の身体がバラの雨に埋もれて

いく：

美也子の声「私決めた。この子を産んで、

立派に育てる。そしてこの子が成人した時

その時ケンちゃんのところに行く：』

病室で日記を書く美也子。

美也子の声「だからあと20年、お腹の子が

立派な大人になるまで頑張るから。

それまで待っててネ。いつも一緒だよ』

○行田家・自宅アパートの一室

日記を手にしたまま眠っている一成。

涙が頬を伝う。

○同（翌朝）

電話が鳴り響く。

一成、目を覚まして電話に出る。

一成「（電話に）ハイ、行田です」

橘川の声「一成くんか、橘川だ。お母さんは

見つかったか？」

一成「いえ、まだです」

○新幹線の公衆電話

橘川、電話している。

橘川「そうか：実は大至急、君に見せたいものがあるんだ。今から会えるか？」

○東京駅付近の喫茶店

一成と橘川。

橘川「カバンから『永遠の空』という

表題の手作りの文集を取り出す。

橘川「事故から20年目の節目に、遺族会が

作った文集」

橘川「ページを広げて

橘川「この中に匿名で書かれた手記がある」

一成「手記を見る。

一成「（読む）あなたのそばへ：」

美也子の声「あなたのそばへ：

あつという間の20年でした。

おかげさまで子どもは、彼に会った時「私

一人でしっかり育てて大きくしましたよ」

と自慢できるぐらいに成長してくれました

：もうすぐ彼のところへ行けそうな気がし

ます：またあの日がやってきました。

私の1年の始まりは1月1日ではなくて、

8月12日なのです」

一成「（読み終え）この手記は？」

橘川「お母さんが書いたものだ。遺族会に

確認した」

一成「（読み返し）もうすぐ彼のところへ行

けそうな気がします：！？ やはり母は死

ぬつもりじゃ？」

橘川「わからない：だが、もしそうだとしたら

ら、あまり時間がない。ココ（手記の文章

を指して）」

一成「（読む）私の1年の始まりは1月1日

ではなくて8月12日：：3日後？」

橘川「とにかく、急いでお母さんを探さない

と」

一成「でも、どこをどう探せば？」

橘川「墜落現場だ」

一成「：御巢鷹山」

橘川「それ以外には考えられない」

一成「：：」

○山中

一台の車が険しい山道を登っていく。

○御巢鷹山・登山口

車を駐車する橘川。

橘川「（時計を見て）午後4時か：日没までに下山できるかどうか」

一成「一日たりとも無駄にはできません。行きましよう」

橘川「そうだな」  
山道に入る2人。

○険しい山道を登っていく2人・点描  
遠くの尾根に『U字溝』が見える。

○尾根

「昇魂之碑」に到着する2人。

その石碑の周辺にたくさんの墓標が立てられている。

橘川「お父さんの墓標は？」  
一成「こつちです」

○同・賢一の墓標の前

竹筒に花が供えられている。

橘川「まだ新しい」  
一成「母さんだ。この山に来てる」

橘川「今日のところは山を下りて、明日の朝からお母さんを探そう」

○山を下りていく車

○車内の2人

一成「ちよつと寄りたい所があるんですが」  
橘川「……」

○山小屋・外（夜）

車が到着する。

一成と橘川、車を降りる。  
庭で薪割りをする初老の男性。

橘川「誰？」

一成「ナカさん。御巢鷹山の番人」  
橘川「番人？」

一成「ナカさんは毎日尾根まで登って、山道の整備をしてくれています。急なところに階段や手すりを取り付けたのもナカさんです」

橘川「（感心して）へえ」

一成「ほとんどの遺族とも顔なじみで、この尾根のことで彼の知らないことはありません

ん」  
一成「（男性に）こんばんは」

中本「中本（60）、一成をじつと見る。」  
中本「おおっ、一成くんか？」  
一成「ハイ、ご無沙汰しております」  
中本「大学には入れたか？」  
一成「ええ、お陰さまで」  
中本「それは良かった。さぞお母さんも喜んでるだろう：さあ、上がった」

○同・内

囲炉裏を囲む一成、橘川、中本。  
橘川、火のそばに置かれた白い欠片に  
気づく。

橘川「？（なんだろう）」

中本「触るなッ！」

橘川「（驚いて元に戻す）すみません」

一成「（欠片を見て）何ですか、コレ？」

中本「骨だよ、人間の」

一成・橘川「！？」

中本「大雨で土砂崩れなんかが起きると、

未だに出てくる」

一成・橘川「：：：」

中本「これを御堂に納めるのが私の役目」

一成「：：：実は母を探してるんです。母を見ま

せんでしたか？」

中本「ああ、お母さんなら2カ月ほど前に

一度見かけたな」

一成「2カ月前？：：：最近は？」

中本「いや、見えない」

橘川「そんな筈はない。何処を探してもいな

いんです、もうココしか考えられない」

中本「：：：毎日山に入ってる私が見ていない。

だからお母さんはココにはいない」

一成「：：：：」

○旅館の一室

浴衣姿の一成と橘川。沈黙。

一成「ナカさんが言った通り、やはりココに

はいないのかも」

橘川「じゃあ、あの花を供えたのは？」

一成「誰か他の人」

橘川「考えづらいな：：：とにかく明日ギリギリ

まで探してみよう」

一成「：：：先生、仕事休んで大丈夫なの？」

橘川「まあな：：：医者も夏休みぐらいとらせて

もらわんと、こっちが神経やられちまう」

一成「母のこと、どう思います？」

橘川「どうって：：：別に、患者の一人だよ」

一成「（疑いの目）」

橘川「な、なんだよ、その目は……」

○山道（早朝）

……を登っていく一成と橘川。

賢一の墓標の前。

昨日とは違う花が供えられている。

橘川「また新しい花だ」

一成「やっぱり母さんはココにいる」

橘川「でもいつ来たんだ？……まさか夜中に」

一成「その時、中本がやって来る。」

一成「（呼び止めて）ナカさん」

一成「中本に花を見せて

一成「この花、わかりますか？ 父の墓標に

供えてあったんです」

中本「ピンク色のスズランに似た野花。」

中本「イワカガミだ……（よく見て）いや、違

う、これはヤマイワカガミと言ってこの辺

りには生息してない種類のものだ」

橘川「えっ？」

一成「じゃあココから一番近い所で、この花

が咲いているのは？」

中本「ヤマイワカガミは水のきれいな岩場に

しか咲かない。考えられるとしたら……あそ

こだ」

中本「ある方向を指さす。

一成「（見て）U字溝！？」

中本「あの山の沢沿いならヤマイワカガミが

咲いてるかもしれない」

一成「成と橘川、顔を見合わせ、

一成「母はあそこだ」

橘川「急ごう！」

○山中

遠くにU字溝が見える。

道なき道を進む一成と橘川。

遠雷。

橘川「ひと雨、来そうだ」

○雨

やがて本降りになる。

○山中

辺りが急速に暗くなっていく。

橘川「引き返そう。これ以上行ったら遭難す

るぞ」

一成「先生は戻って下さい。僕は行きます」

一成「沢を指して山を下る。」

橘川「……ええい、ままよ」

橘川も後に続く。

○暗闇の山中

小雨が降っている。

2人は懐中電灯を頼りに進む。

一成、足を滑らせてズルズルと滑落！

一成「（悲鳴）わああッ！」

橘川「（叫ぶ）大丈夫か！？」

助けに行く橘川。

橘川「（一成を介抱し）大丈夫か？」

一成「すみません。足をヒネったみたい！」

右足首を痛めて歩けない。

橘川「（一成に肩を貸して）ちよっと休憩しよう」

2人、大きな木の下で休む。

橘川、ケータイで自分の居場所を確認しようとするが、電波が圏外。

橘川「ダメだ、つながらない」

一成「……」

橘川「（地図を見て）どうやら道を見失ったらしい」

一成「（目を閉じて）……」

橘川「だから言わんこっちゃない……どうするよ？」

一成「……」

橘川「（一成を見て）どした？」

一成「……何か聞こえる」

橘川「聞こえるって……雨の音以外、何もしないけど」

一成「（耳を澄まして）聞こえる」

かすかに聞こえてくる物音。

一成「ザクツ、ザクツ」

橘川「この真つ暗な山中に？」

一成、痛めた足を引きずりながら音のする方へ歩き出す。

橘川「おい、ちよっと……（追いかける）」

そして、小さな丘を越えると

一成「！？」

樹木が生い茂る山の斜面に、ポツカリ

空いた円形広場のような場所。

その中央には巨大な穴があり

ライトに照らされている。

橘川「何だあ？」

見ると、スコップで穴を掘ってる人が

いる。

一成「母さん！？」

美也子、雨の中カッパを来て懸命に穴を掘っている。  
その穴の脇にはテント。  
一成と橘川、美也子に気づかれないようにその様子を見守る。  
橘川「ずっとココで穴を掘ってたのか？」  
一成「やっぱり母さんは死ぬつもりなんだ」  
橘川「：いや、違う」  
一成「えっ？」  
橘川「むしろその逆だ」  
一成「：：」  
橘川「お母さんの目を見てみる。あれは死ぬ人間の目じゃない。生きようとしている目だ」  
雨の中ひたむきに掘り続ける美也子。  
曇りのない水のような瞳。  
その姿は、賢一と過ごした新婚時代に戻ったかのように若々しい。  
一成「でも、こんなことしてたら、ぶっ倒れちゃうよ。やめさせなきゃ」  
橘川「一成が行こうとすると、橘川、止める。なつても、自分が納得するまでやらせてあげるんだ」  
一成「！？」  
橘川「事故の時、お母さんは妊娠中だった。だから夫の遺体を探すことも悲しむこともできなかった：20年経って、今やつとお母さんは夫のために全身全霊で悲しみ、ボロボロに傷つこうとしている」  
一成「：：」  
橘川「これは大切な喪の作業なんだ。お母さんは今、身を粉にして夫の最後を看取ろうとしている。夫を天国に送り届けようとしている」  
一成「：：」  
橘川「だから、好きなようにさせてあげるんだ」  
一成、突然泣き出す。  
橘川「：一成くん？」  
一成「だったら僕も悲しんでいいですか？」  
橘川「！？」  
一成「死んだ父さんのためにボロボロになるまで傷ついていいですか？」  
橘川「：：」  
一成「僕だって、母さんと一緒なんです」  
一成、足を引きずって美也子のところへ行く。

美也子「（気づいて）一成！？」  
一成「（笑顔で）僕も手伝うよ」  
美也子「……」  
一成「で、何を探せばいいの？」  
美也子「……実はね、ケンちゃんが飛行機に乗る前に電話くれたの。東京のデパートでプレゼント買ったからって」  
一成「モノは？」  
美也子「わからない。帰ってからの楽しみって言ってたから」  
一成「それを探してるの？」  
美也子「そう。あるとすればこの辺なのよ」  
一成「……なるほど。まあ、とにかく探しましよ！」  
橘川が現れる。  
美也子「橘川先生！？」  
橘川「（照れくさそうに）僕も及ばずながらお手伝いします」  
橘川も穴を掘り始める。  
一成「それで何を探せばいいの？」  
橘川「プレゼント？……ああ、プレゼントね。よし、わかった（穴を掘る）」  
美也子、その様子を見て笑う。  
黙々と穴を掘る美也子、一成、橘川。  
やがて、雨が上がり、風が吹く。  
空から赤い花びらが落ちてくる。  
一成「バラの雨！？」  
橘川「えっ？」  
美也子「まさか、バラのわけないでしょう。（見上げて）アレよ」  
一成、見上げると、大きな百日紅の木。風に吹かれて、百日紅の赤い花びらが落ちて、3人に降り注ぐ。  
美也子「（空を見上げて）ケンちゃんよ、ケンちゃんが降らせてるのよ！」  
一成「（空を見上げる）……」  
上空から賢一の声が聞こえる。  
賢一「3人を祝福するかのよう」  
いつまでも降り注ぐ。

（終わり）  
この物語はフィクションであり、登場人物はすべて架空のものです。

(参考文献)

『喪の途上にて』野田正彰著 (岩波書店)  
『茜雲』 8・12 連絡会 (木の泉社)